



きょうはなにいろっ

# けるくるーる

こぎんとこぎんのある生活をたのしもう

第 10 号



発行:こぎん刺し 絵糸

2015/5/16

<http://kogin-eito.com/>



## モドコ・アレコレ

### ◎豆ッコ

小さくて簡単なかたち。

だけど、こぎんには欠かせないアイツなのです。

豆。小さくてころころとした豆を模したのが、今回のモドコです。こぎん刺しの基本的な柄は、小さなものから大きなものまで二十数種あると言われていますが、その中でも一番基礎になる柄のひとつ。大きな柄の中にも、探せばこの「豆ッコ」が隠れている、なんてこともよくあります。

シンプルな白抜きひし形をしたこのモドコ。白黒反転させたものは「かちやらす」という「裏ではないよ」という意味のモドコになります。こちらにも、何ともお茶目なネーミングではありませんか。



「豆ッコ」を連続させてつなげていけば、格子柄に。行儀よく並んだ様からは、袋や瓶にたっぷりつまった豆を想像してしまいます。他のモドコの合間にポツリポツリと挟んでみるのも、ころんな可愛らしさです。



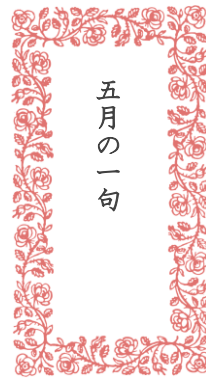
豆ッコとカチャラス

豆ッコの連続



豆というのは、日本の文化にちよくちよく登場するモチーフです。「まめに働く」という言い回しから健康で丈夫であれという願いを込めたり、節分で鬼を追いつつ出すときに厄除けとして撒き福を呼んだり。祝い事のお膳に欠かせないさまも、こぎんのモドコとしての「豆ッコ」の存在感によく

似ていますね。小さいけれど、日本人にはお馴染みの縁起もの。昔々の女性たちも、家族の健康と幸せを願いながら刺したりしたのでしよう。



## 五月の一句

### 高速の脇に泳ぐや五月鯉

(実)

ゴールデンウィークのハイウェイ浴い。初夏の風が爽やかに吹きわたる中、いつもの吹き流しの代わりに鯉のぼりが気持ちよさそうに泳いでいた。背景には街より少し遅れて咲く山桜。緑のコントラストを楽しみながら、暮を開けた連休の過ごし方に思い巡らす。



## 季節のぜいたく

### ◎そらまめ

ついでにもひとつ、豆の風景。

居酒屋さんで大皿に盛られた、そらまめのさや。この季節ならではのメニューだ。重そうな皿を慎重に置いて店員さんがいなくなると、誰もとなしに手を伸ばし始める。

きれいな緑に黒くこげ目のついたさやは、以外にやわらかでみずみずしい。中のふかふかのベツドあってこそ、しっとり焼き上がるのだ。ひと粒ずつ豆を取り出して、薄皮を剥きながら塩で食べる。初夏の香りがする。

- ① そらまめは、緑が濃くつやがあり、ずつしり、ふつくらしたものを。
- ② さやごとトースターへ。皮がこげくらいに焼く。
- ③ さやを割り、中の薄皮はお好みで剥いて、塩や醤油でどうぞ。

\*洋風に、にんにくとオリーブオイルで炒めても美味しいですよ。





春だからっていうただそれだけの理由で色々なことが変わったりするのが、僕は我慢ならない。そして、そのせいで僕に割り振られる仕事がいっしょに増えたりすることも。

僕は今日、増えた仕事ではち切れそうなかばんを提げて、川原をふらふら歩いていた。途中のベンチに腰かけ、かばんから仕事の束を取り出して、一枚ずつ繰ってみる。やりたくない仕事、やってもいいけど面倒な仕事、見たこともない仕事。息を吐いて空を仰ぐと、何かが視界をちらちらした。蝶だ。風に乗って頼りなげに舞っていたかと思うと、じょじょに降りてきて、あれれと言う間に、僕の手元の仕事の束を二枚の羽根でばちんと綴じて、そのまま飛んでいく。

僕は数秒ぼかんとしたのち、あ

わてて蝶のあとを追いかけた。といても、なにせ蝶だから、すぐに追いついたけれど。蝶の横について、しばらくゆっくり歩いてみると、白や黄色や桃色の花があちらこちらに咲いていたり、人々が何やら楽しげに歩いていた、川原というのは思ったよりもずつとにぎやかな場所なのだった。さつきふらふら歩いていた時は、まるで気付かなかった。

\*\*\*

いつの間にか、僕と蝶は川原を離れて街をさかのぼり、事務所のすぐそばまで来ていた。蝶が前進をやめたので、手を伸ばして仕事の束を受け取ると、蝶はひらひらと川原のほうに戻っていき、僕はそのまますすぐ事務所の扉を開けた。



作・藤田一樹（ふじたかずき）

詩人、ライター。フリーペーパー『シップ』主宰。

### 今月の花ツク

③ あじさい



「高慢」「辛抱強い愛情」「元氣な女性」などは美しいが冷淡だなど花言葉も七変化。

連休明け、日常のリズムを取り戻した頃、にわか風が湿り気をおびてくる。そんな頃、花家の店先に並び始めるあじさいを見る。実に目に爽やかだ。きれいに包装されてお客を待っている。

土の酸性度で花の色が変わるというが、一輪ごとに僅かなグラデーションがあるのが、なんだか柔らかな見えてよい。青々とした葉の繁りに、気づけば花を咲かせているさりげなさ。外のあじさいは雨の中静かで楚々とした姿だが、鉢植えだとまるで別人だ。ポリュームたっぷりの華やかさに、大ぶりのリボンがよく似合うのがなんとも不思議である。

こぎんの里・弘前では大仏公園というところで毎年あじさいまつりが開かれる様子。東京では一足先に咲くだろう。梅雨までもう少し。今年は何色の花がみられるだろうか。

### A tale of a tailor ~ある下町の仕立て屋さん②~ (前回)ぐうぜん見つけたオーダーワイシャツの店。いざ注文です。

七十代も後半だろうか。店主は、パリッとした真っ白のワイシャツを身に付けていた。袖の折り目の几帳面なラインがまぶしい。

生地も色々あると、まずは見本帳をバラバラとめくってみせてくれた。「だけどね」と、カウンターの向こうから店先のとある一角を指さす。一着分ずつ切り分けられた生地が、丁寧に畳まれ、整然と並んでいた。「お勧めはコレ。たまたま手に入ったところだから」彼は得意顔で一枚の生地を持ってきた。それは一見地味なベージュの生地だったが、よく見ると地模様は光沢がさりげなく可愛らしい。一目で気に入ってそれに決めた。

店主はすこし震える手で私の注文を書き留めていく。書き込んでいるのはチラシの裏で自作したメモ帳だ。(続く) 著・庭野みのり

### 『編集後記』

早いもので、このささやかな紙ももう十号になりました。創刊より三度目の五月。でもまだまだモドコはありますし、連載も続いていきます。これからもよろしくお願いたします。⑥